

月やあらぬ春や昔の春ならぬ(下)

大野 晋

この歌の全体の意味を取る上で動かない手懸りは、この歌の下の句である。

わが身一つはもとの身に於て

この句の眼目は、「わが身一つは」の「は」にある。

この「は」の用法は対比の意味の濃厚な提題の表明である。「わが身一つダケハ昔のままの身であつて」というのである。従つて言外の意は「それ以外の対比物は、もとのままのものではない」ということである。

つまり

月やあらぬ

春や昔の春ならぬ

の二項の、月と春とは、もとのままではないという趣旨を、この「は」の用法から汲みとらなければならぬ。

ではこの二句はどう解釈されるべきなのか。それは、この二句が次の①②③④⑤とどう違うかということを、はっきり認識することによってなされるだろう。

①月はず

春は昔の春ならず

②月もあらず

春も昔の春ならず

③月こそあらず

春こそ昔の春ならぬ

④月なむあらず

春なむ昔の春ならぬ

⑤月かあらず

春か昔の春ならぬ

まず①から考えてみよう。「あらず」とは平安時代には、「違ふ」という意味で使う例が多くあるから、①ならば「月ハチガッテイル。春ハ昔ノ春デハナイ。吾ガ身一ツダケハ昔ノママノ身デアッテ」の意となる。これによれば全体の歌意は明瞭である。しかし、「月やあらぬ」の表現している、何か屈折した訴えが「ハ」と「ヤ」によっては表現されていない。我々は係助詞「ハ」と「ヤ」との相違を見なくてはならぬ。

②の「月も」「春も」の場合は、「月ハ」「春ハ」とは異なっている。「ハ」が「月」「春」を別々に提示してそれぞれを否定しているのに対して、「月モ」「春モ」は月も春も同様に違つてしまい、変わってしまったと歌っているわけで、歌意は明瞭となるが、やはり「ヤ」を用いた気持は表現されない。

③は「月コン違ッテイルが、春コン昔ノ春デハナイガ」の意で、下の句を「……もとの身にして」と歌い納めていることと照応しない。

もし④のような表現があったとすれば、「ナム」は伝聞によって、あるいは、思い込みによって、(まれには見たことよって)確信しているという意を表わすから、「月ハタシカニチガッテイル、春ハタシカニ昔ノ春デハ

ナイト思う。吾ガ身一ツダケハ昔ノママノ身デアッテ」の意となるだろう。ここでは一方的に思い込み、確信していることが表明されていることになる。しかし、「ヤ」はそういう形で確信を示す係助詞ではない。

⑤のような「カ」の使い方は、平安時代には普通は現われない。当時は「カ」は疑問詞と一緒に使われるのが一般だからである。従つて、それを訳することは無意味であるが、「カ」の用法を示すためにあえて現代語をあてはめてみれば、「月が違ッテイルカドウカ分ラナイ。吾ガ身一ツハ昔ノ春デアルカドウカ分ラナイ、吾ガ身一ツハ昔ノママノ身デアッテ」とでもなるだろう。

「月ヤアラヌ。春ヤ昔ノ春ナラヌ」
は、右の①②③④⑤とは違つた表現である。どこが違うのか。

私は一九八四年から一九八五年にかけて、「日本語の構文——係助詞の役割——」(一)(二)(三)(四)(五)を「文学」に書いた。その(五)で「カ」と「ヤ」を扱い、この歌に觸れている。そこでは次のように書いている。

「月やあらぬ」とは作者の胸中の見込み、あるいは強く言えば確信を表わすもので、「月ハ違ッテイルノダナ」と訳される。「春や昔の春ならぬ」も「春ハ昔ノ春デハナイノダナ」とでも訳すべきところで

ある。そしてその判断の背後に「ソウデショウネ」と相手に語りかけ、問いかける気持を表明している。私がこのように解釈した理由は、その次の節の次の文章が示している。

もし「月は昔の月ではないのか、春は昔の春ではないのか」と現代語に訳すと、それは、あまりにカの「判断不能の表明」に片寄りすぎて、ヤの示す微妙な肯定的な見込みの気配を見ないことになる。

私は「日本語の構文」を書いていた頃、カとヤとの相違を見ることで手一杯であった。そこでヤについて、「見込みがある」とか「肯定的である」とかいう説明も与えている。これはカの「疑問」の表現が「判断不能」を表わすに對し、ヤも「疑問」を表わすとだけ簡単に扱って、その区別を軽視している現在の学界の支配的な空気に對する批評として、ヤを単純な「疑問」とせず「質問」と扱い、さらには「見込みを持った問いだし」であることを明確にしたいと考えてのことであった。そこに「肯定的」という表現の生じた理由がある。

しかし、今思うと、先掲の訳文は「ヤ」の根本義を的確には表わしていないように思う。「ヤ」の奈良時代の用法では、すでに表現者が一つの判断、または推測を持っていて、それを相手に提示して

問いただし、自分の判断または推測が正しいことを相手に承認させようとするものであった。

嘆きつつわが泣く涙……雨に降りきや

(万葉・四六〇)

といえは、「私ノ涙ハ雨トシテソチラニ降りマシタ。ソレニチガイアリマセンネ」ということである、「雨として降ったかどうか分りません」といつているのではない。作者はヤによって自分の判断を主張しているのである。ヤは主張を含んでいる。だからヤは反語にも使われる。反語とは、言い返すことによって否定的に自己の主張を表現することである。

我忘れめや

といえは、「忘れルダロウナンテ。イヤ忘れハシナイ」ということであり

よろしからむやは

(枕・二七八)

が反語だというのも、「ヨロシイダロウ」という一旦下した判断をヤハによって相手につきつけ、再び問題にするのである。裁判でも、一度下した判決に對して再審するということは、判決を否定することである。それと同じく一度下した判断を再び問題化するのは、その判断を否定することである。だから、「よろしからむやは」はヨロシクナイであり、ヨロシイハズハナイの意を表わ

すのである。

つまりヤは、判断を相手につきつけて問い質し、それによって自己主張を行うのである。それはつまり、すでに見込みを持っていることであり、推測を表明することでもある。また相手へ訴えかける気合もある。これを単に「疑問」として「カ」と同列に扱うことの誤りは明らかである。

しかし、また、それを単に肯定的見込を持つとだけ扱えば、それは幾分「ナム」に近づき、ヤの特性を見失った理解となろう。

むばたまの我が黒髪や変わるらむ鏡の影に降れる白雪

(古今・四六〇)

これを「ワガ黒髪が白く変ッテイルノダロウカ……」と訳すのは、ヤが疑問だという観念に支配された理解である。私は前稿において、「アア、私ノ黒髪モ今ヤ白く変ッテナ……。」と訳した。これはヤとカの相違だけを意識した解釈である。ヤの背後にはいつも自己主張があることを思えば、「わが黒髪や変わるらむ」の背後には、「黒髪は変るはずはないのに」という、自分の思い込みがあることを見なければならぬ。その思い込みを相手につきつけて「……ヤ変わるらむ」の形で「変ることはあらずもないのに」といっていると見るべきである。

してみれば、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」においても、「月は変るはずはない、春は昔の春でないはずはない、それなのに月は違っているし、春は昔の春ではない」といっていると見るべきである。この判断の下にく「ヤ」の適切な現代語は無い。「ナ」と訳しても、「カ」と訳しても適当でないがやむをえない。我々は訳さずに説明によって原文を理解する以外にないだろう。

こう見るときに、この業平の一首は業平の気持を汲んだ理解だということになるのではあるまいか。

私は前稿の訂正を兼ねて、この歌の解釈をここに取り上げたのである。